日下山 願泉寺 史伝

木の津の遺跡

日下山　願泉寺　史伝

木の津の遺跡

名勝
願泉寺庭園

木の津の遺跡 ◉ もくじ

開創 1
法脈伝流する木津山無量寿院 2
石山法難と日下山願泉寺 3
元国宝客殿、茶室と大阪府名勝庭園 4
願泉寺木津人馬講の由来 5
寺紋「三ツ葉葵」のいわれ 6
津村御堂と願泉寺
風雅の流れ 7
現状 ―― 令和の新時代 ―― 9
当寺をよんだ和歌 10
願泉寺系譜 11

土佐光成筆　飛鳥井雅光讃　願泉寺古図

開創

当寺は、今を去ることおよそ千四百年、聖徳太子の重臣、遣隋使として有名な小野妹子大臣の八男多嘉麿（たかまろ）義持に始まります。義持は太子に奉仕して、物部守屋（もののべ）討伐に際してはしばしば大功をたて、その賞として河内国日下（くさか）の荘に、田地七百代を賜わって、難波の海浜に住いしていました。

推古天皇元年十月（五九三）荒陵（あらはか）の山に四天王寺が創建されるとき、諸国から海を渡って運ばれた木材が義持の館の近くに集積されて、今日の地名「木津」の起こりとなりました。この巨材を荒陵の山へ運搬することは大難事でしたが、或る夜老鼬（いたち）が義持の夢に現れて、「我はこの地に永く住まうもの、わが足跡にそって掘割りを作るように」との指図によって、鼬川をひらいて木材を運ぶことが出来たといいます。

鼬川は後世、地元の子守唄に歌われるまでに有名になりましたが、昭和の初めに埋められて、今日では知る人も稀になりました。

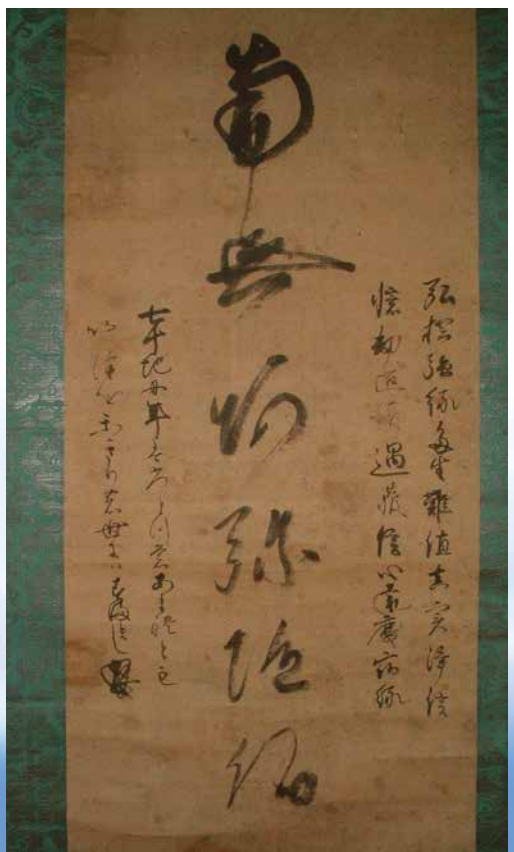
推古天皇十一年（六〇三）に、聖徳太子は、欽明天皇の行宮の地に寺院を造ることを企図され、夢告の功のあった義持に、永證なる法名と白檀木の阿弥陀如来と薬師如来を賜り、無量寿院と命名された堂宇の別当職に任じられました。また「日下」の姓も与え、永く家を継いで「木の津」において仏道を弘め、念仏三昧を修すべき旨を命じられました。これが当寺創建の濫觴となります。

法脈伝流する木津山無量寿院

二十一世秀意は天台座主慈円和尚に師事しましたが、建久二年三月（一一九一）、四天王寺に逗留中の慈円和尚は当寺を訪れて、遠く西の方、播磨、淡路の景を眺望して、「高きに登らずして遠く眺望を恣にするには、独りこの勝地にあり」とて、木津山と揮号され、それ以来木津山の山号を称しました。

二十七世乗教は比叡山に登って仏学を修めること十有余年、享徳三年十月（一四五四）学成っての帰路、京都東山にて本願寺第八世蓮如上人に会い、そのすすめによって、難行の聖道を捨てて、易行他力の念仏の大道に入ることを決心し、ここに永く浄土真宗の流れをくんで、木津門徒の教化にはげむにいたったのです。蓮如上人は喜びのあまり、自ら六字の名号に聖教の文一句と和歌一首を書き添えて下附されました。この名号は、後に述べる本願寺第十二世淮如上人の奥書つき御文章と共に寺宝として現存、本願寺宗宝の指定をうけているところの貴重な史料となっています。

二十九世乗空の時、応仁の乱の兵火をうけて焼亡しましたが、永正四年三月（一五〇七）境内を堂面より現在の地に移し、堂宇を再建しました。

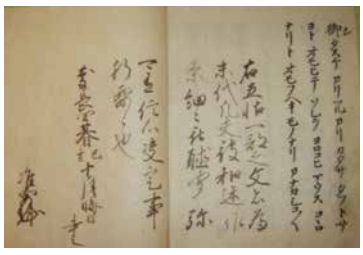


蓮如上人御下賜の六字名号（宗宝）

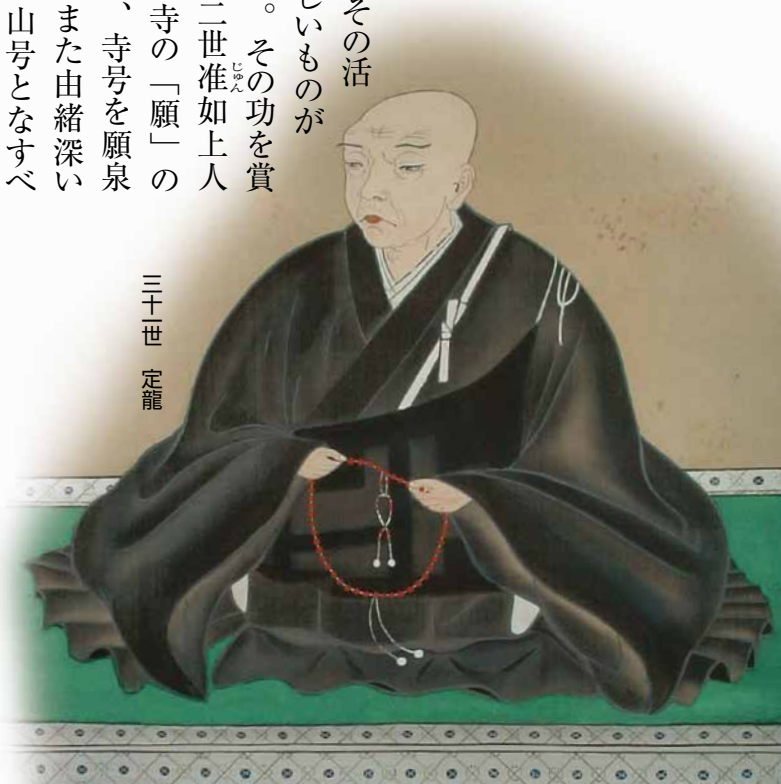
石山法難と日下山願泉寺

三十世教龍当時の本願寺は、現在の大阪城の地にあって世に石山本願寺といわれましたが、本願寺第十世証如上人の遺された『天文日記』には、教龍が上人に仕え、木津門徒の信仰篤き姿が諸々に記され、戦国時代に処した世情の有様が手にとるようにうかがわれて大変興味深いものがあります。

織田信長によっておきた、前後十一年にわたる石山法難の経緯は史上稀に見るものでしたが、三十一世定龍（一六四〇）は、石山本願寺に定衆として仕え、武勇に秀で、石山合戦において大いに戦功ありました。彼は、木津、高津の門徒の面々をひきいて、本願寺第十一世顕如上人の危急を救い、西国より送られた兵糧を運び、また戦いに利なく上人が紀州へ下向されるに際しては、騎馬にて身辺の護衛にあたるなど、その活躍に目覚しいものがありました。その功を賞して、第十二世准如上人は特に本願寺の「願」の字を許され、寺号を願泉寺となし、また由緒深い日下の姓を山号となすべき旨仰せられ、その後は「日下山願泉寺」と称することとなりました。又自筆の奥書を付した五帖の御文章や、花押をのせた馬の鞍なども賜りました。定龍の活躍は昭和三十七年に脚色されてラジオ放送の連続ドラマにもなりました。



准如上人真筆奥書　五帖一部の御文章（宗宝）



三十一世　定龍

戦災前の庭園

元国宝 客殿、茶室と大阪府名勝庭園

現在の茶室

定龍は他面風雅を解した人で、かねて武野紹鷗（じょうおう）や千利休とも親交がありました。石山本願寺の跡に構築せられた大坂城が当時の政治の中心地となり、参覲（さんきん）の諸国大名中には定龍について茶礼を学ぶものも多くありました。後に豊臣と徳川が不和となり、元和元年（一六一五）大坂城落城の後、当時定龍と親交のあった仙台侯伊達政宗は、帰国に際してその客殿（蔽芾堂（へいひどう））と茶席（泰慶堂（たいけいどう））を定龍に贈りました。

その後寛永二年正月（一六二五）木津村大道町よりの出火に際して本堂、庫裡などを焼失しましたが、客殿と茶室は難を免れ、昭和十二年七月（一九三七）国宝建造物に指定されました。庭園も同年に大阪府の名勝指定を受けました。これらの指定後には願泉寺は一躍大阪の名所となり、好事家の来訪が後を絶ちませんでした。客殿と茶席は昭和二十年三月の戦火に惜しくも焼亡し、庭園のみ旧態を残して現在にいたっています。現在の庭園は、寛永の火災の後、江戸時代の正徳年間に京都の庭師であった正阿弥によって整えられたものですが、室町時代の絵師の相阿弥の構想に由縁があるとの伝承もあります（昭和四十六年に大阪府名勝庭園に再指定）。

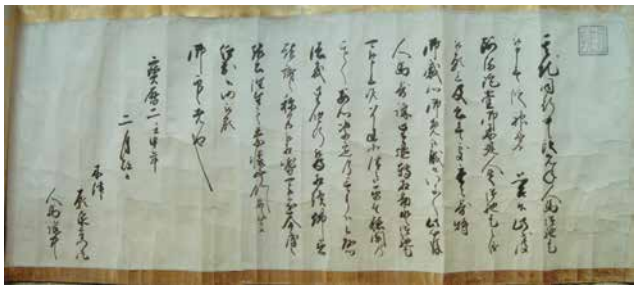
なお、寛永の大火に際して、定龍は本山にあって不在であり、病床にあった養子の賢融が床を蹴って、火中に飛び入って仏像、宝物の一部を辛うじて取り出しました。残部を取り出すべく再び火中に入りましたが、猛火の為に帰らぬ人となったという惨事がおきています。

戦火により焼亡した茶室

願泉寺 木津人馬講の由来

石山法難につくした功名話は木津門徒代々に語りつがれましたが、後、門徒中相集って、「陣馬講」と称する講が結ばれ、法味愛楽の集いとして四百年の今日にいたるまで連綿と受け継がれています。後、本願寺第十七世法如上人より消息を賜り、太平の世に陣馬の講名は適しからずとあって、「人馬」とあらためる由の仰せによって、今日は願泉寺木津「人馬講」の名称のもと、願泉寺の門徒すべてが講員として登録されています。

毎年本願寺の御正忌報恩講の第三日目即ち一月十一日には、御頭講の御頭人として招きをうけ、非時の勤行の調声を務め、お斎の接待を受ける例となっていて、二百五十年に亘る行事として今日も続けられています。古来木津の地は六ヶ町よりなり、戸毎にお仏壇のかたわらに竹筒をつるして、朝夕のお参り毎に一文銭を投げ入れて、一日の平穏無事を喜びましたが、そのお金を一月十一日の前夜竹筒を割って紐に通し、京都本願寺参拝のみぎりに持参、お供えをする習慣が先年までつづけられていました。これを日掛銭といって、貯蓄の習慣が宗教行事と結びついた、まことに意義深いならわしでした。



宝暦二年　法如上人より下げられた人馬講への感謝状

寺紋「三ツ葉葵」のいわれ

三十四世観龍は、縁戚であった紀伊藩士堀田家より当寺に入りました。その関係から、紀伊徳川家の参覲交代の途上では必ず当寺が陣屋にあてられ、後に徳川家より「三ツ葉葵」の寺紋を許されることになりました。観龍は、紀州侯より大いに助力を受けて、正徳四年（一七一四）に、寛永二年の罹災以来の仮堂宇を改めて、華陽に聳え立つ九間四方の本堂や庫裏の再建を果たしました。これらの堂宇は天保年間以降、紀州侯をはじめ、土佐、加賀、彦根等の諸侯の陣屋となりました。慶應二年（一八六六）の長州討伐の際には、紀州侯は当寺から出陣されたとのことです。客殿のさやの間には当時の炊事の焦げ跡が板縁に残っていて、慌ただしい幕末の世相の一端を物語っていました。

津村御堂と願泉寺

享保九年（一七二四）大阪津村御堂炎上、観龍は門徒を具して馳せ参じ、五尊及び宝物を当寺に移して安泰をはかりました。本願寺第十四世寂如上人、時世の第十五世住如上人は共に特使をもってその労を謝せられ、仮本堂に使用された厨子、須弥壇等を授与せられました。

また、大塩平八郎の乱には、三十八世英龍が同じく津村御坊を守護し、本願寺第二十世広如上人より、住職及び人馬講中に対して賞美の御沙汰がありました。

四十一世
經龍(樟蔭)

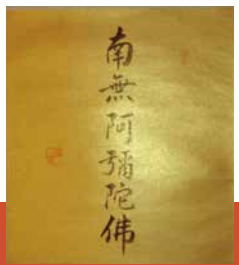
風雅の流れ

三十一世定龍は茶道の嗜(たしな)みが深かったのですが、その伝統をうけて、三十六世降龍は聖護院門跡盈仁法親王が当寺に来駕滞在せられたとき、天王寺楽人を招いて共に管絃(かんげん)を奏し、また自ら横笛を製作して法親王より「柴舟」の銘を賜るなど風雅の道に没する余り、寺務職を次弟の昇龍にゆずりました。辛苦を重ねて茶道の奥義を官休庵に学び、雲州松平不昧侯の寵遇をうけ、初代の木津宗詮、軒号を「寒松」庵号を卜深(ぼくしん)（木津の音よみ）と名乗って家元を預かり、大阪北浜に稽古場を開いて、百才の天寿を全うしました。

四十一世經龍は若干十六才で住職を継ぎましたが、寺門経営に見るべきものがあり、昭和八年に本堂の屋根替え、客殿、茶室の大修理等面目を一新しました。また本願寺宗会議員も二期つとめました。そのかたわら、降龍以来の雅楽に堪能、樟蔭と号して、明治十七年に同志と共に天王寺舞楽再興グループの「雅亮会(がりょうかい)」を組織し、明治二十三年には願泉寺にその事務所を置きました。明治二十六年には会則を設けて初代会長となり、それ以来昭和十八年十二月に逝去するまで六十年にわたり幾多の門弟を育成しました。樟蔭は昭和四十九年に天王寺舞楽の楽風継承の功績により大阪府から上方芸能人顕彰をうけ、その遺徳を永く追慕するために、毎年命日の十二月五日には四天王寺において管長猊下以下一山によって「樟蔭忌」がいとなまれています。

しかし、第二次世界大戦の戦禍によって雅亮会も大きな打撃をうけ、再び天王寺舞楽継承の危機にみまわれます。四十二世攝龍は、先代の遺志を継ぎ、戦後の雅

攝龍



攝龍揮毫

降竜作、横笛「柴舟」

四十二世　攝龍

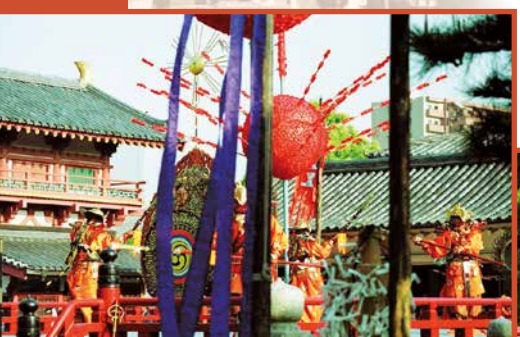
亮会の復興に取り組みました。攝龍は、京都帝国大学文学部在学中には創生期の京都大学オーケストラでチェロを演奏した音楽家でした。その才能を雅亮会理事長、初代楽頭として遺憾なく発揮し、昭和五十一年には雅亮会の伝承する「聖霊会の舞楽」が重要無形民俗文化財指定を受け、昭和五十三年にははじめてのアメリカ海外公演でカーネギーホールの舞台を踏むなど国内外で大きな成果を上げました。昭和五十一年には大阪文化賞を受賞、また、勲五等旭日大綬章を受けるなど、様々な名誉に輝きました。

昭和二十年三月の大阪大空襲によって、正徳年間建立の本堂を始め、元和の遺構として国宝に指定された客殿、茶室等一切の堂宇は焼亡し尽くされました。しかし、軍務から復員した攝龍はひるむことなく、願泉寺門徒とともに、昭和二十五年五月にははやくも本堂の再建を成し遂げました。また、昭和二十六年九月には願泉寺内に木津幼稚園を創設し、約三十年間運営し、三千名にのぼる卒園児を送り出しました。その間、津村別院会役者を務めるとともに、本山や宗門校相愛大学において永年雅楽指導をするなど、本願寺式務職についての功績を認められ、名誉侍真に任ぜられ、大谷光真前門主から本願寺名誉総裁賞を受けています。

昭和六十一年に継職した四十三世功龍は、龍谷大学文学部博士課程修了後、寺務にいそしむかたわら宗門校相愛大学に奉職して東洋音楽史を講じ、教授職を経て学長を務めました。また樟蔭、攝龍の遺志を継ぎ、雅亮会を指導し、理事長を経て第二代楽頭を務めました。

また、功龍は、平成十五年から、約一年かけて阪神淡路大震災で損傷を受けた本堂の大改修を敢行しました。この改修に際し、本堂の地下に納骨堂「あおい堂」を新たに設置し、また官休庵職分木津聿斎宗詮の設計になる茶室「相應庵」を庭園内に移築するなど、寺院設備の充実を図りました。

笙「朝陽」



春の本堂

あおい廟

秋の茶室

四天王寺での現住職

現状 ――令和の新時代――

相愛大学学長、雅亮会楽頭を務めた功績が認められ、功龍は平成二十五年には教育者として瑞宝中綬章、平成二十六年七月には日本藝術院から雅楽の分野において恩賜賞・日本藝術院賞を受賞しました。しかし、その直後平成二十六年八月に急逝し、四十四世真龍が願泉寺住職を急遽継職致しました。真龍は、京都大学で法学、宗教学を修め、平成十一年には京都大学で文学博士号を取得。平成十五年には宗教哲学の著作で日本宗教学会賞を受賞。ドイツ留学を経て平成十六年にはドイツ・ボーフム大学で日本哲学や仏教を講じ、平成二十年から八年間相愛大学で准教授を務めるなど、国内外に亘って学究としての修養に努めていました。

継職後は、埋葬多様化の時代に即応すべく、平成三十年に願泉寺永代墓「あおい廟」を設置するなど、急速に変化する現代人の宗教意識に寄り添う寺院運営を展開しています。また、宗教哲学の学究として京都大学大学院、龍谷大学等で講師を務めつつ、功龍の跡を継いで雅亮会の運営・指導にも注力し、雅亮会は、聖徳太子以来の「天王寺楽所」の名称使用を四天王寺から正式に許され、また、ポーラ伝統文化振興財団から第四十回伝統文化ポーラ賞（地域賞）を受賞するなど大きな進展を見せています。現在は、天王寺舞楽協会常任理事と天王寺楽所雅亮会副理事長を務めて、重要無形民俗文化財である天王寺舞楽の発展・普及に尽力しています。

法嗣の碩（あつし）（法名 碩龍（せきりゅう））も、得度して僧侶としての道を歩み始め、現在は神戸大学大学院で日本学を研究し、雅亮会で雅楽を学び、後継者としての研鑽を続けています。

令和三年四月

願泉寺四十四世　真　龍　識

恩賜賞・藝術院賞授賞式

当寺をよんだ和歌

聖護院宮盈仁法親王

枝かはす松にかかれる雲かとも
わかむらさきの藤のさかりは

寂如上人

水底は紫しろく見ゆるかな
池のこなたにさける藤波

飛鳥井雅光

松か枝にまたひとしほの色そへて
かかるもあかぬ春の藤波

冷泉為理

相生の松のたのみに藤つるの
千世もゆたかに花咲きにけり

四十二世　攝龍

五十路われ一期一会と待ちわびし
ひじりまつろう今日のよろこび

ももちよにほこりも高き法の園
幼きこらは馳せつまろびつ

願泉寺系譜

600 飛鳥時代	700 奈良時代	800	900 平安時代	1000	1100	1200 鎌倉時代
●開祖 永證《小野妹子八男多羅丸義持》推古十四年丙寅三月十六日寂（六〇六）						
●二世 永玄 舒明十三年辛丑五月十日寂（六四一）四十二才						
●三世 證玄 白鳳十年壬午八月九日寂（六八二）五十二才						
●四世 理玄 朱鳥元年乙酉九月九日寂（六八六）三十一才						
●五世 了印 朱鳥二年戊子二月二日寂（六八八）三十一才						
●六世 了異 天平勝宝八年丙申三月二十日寂（七五六）八十二才						
●七世 了證 天平十五年癸未一月八日寂（七四三）四十一才						
●八世 正印 延暦四年乙丑八月六日寂（七八五）五十才						
●九世 證長 延暦十六年丁丑七月五日寂（七九七）五十八才						
	●十世 雲三 嘉祥元年戊辰八月七日寂（八四八）五十才					
	●十一世 智栄 貞観十五年癸巳八月三日寂（八七三）五十才					
		●十二世 栄三 延喜六年丙寅二月十七日寂（九〇六）四十三才				
		●十三世 智信 延長八年庚寅六月二十九日寂（九三〇）三十才				
			●十四世 應永 貞元元年丙子十月五日寂（九七六）四十才			
			●十五世 玄信 萬寿三年丙寅六月二十九日寂（一〇二六）五十二才			
			●十六世 玄浄 康平六年癸卯五月五日寂（一〇六三）四十四才			
				●十七世 專稱 天永三年壬辰八月二十三日寂（一一一二）五十一才		
				●十八世 性龍 久安六年庚午七月十四日寂（一一五〇）四十二才		
					●十九世 龍與 寿永二年癸卯十一月二十八日寂（一一八三）四十才	
						●二十世 三龍 承久元年己卯五月二十七日寂（一二一九）四十才
						●二十一世 秀意 嘉禄元年乙酉十一月二十六日寂（一二二五）四十三才
						●二十二世 勝龍 建長六年甲寅正月二日寂（一二五四）三十三才

願泉寺の歴史

- 現在地よりも西北数百メートルの欽明天皇の行宮地跡に聖徳太子により当寺が建立された
- 開祖永證は聖徳太子より無量寿院の寺号と白檀木の阿弥陀如来と薬師如来を賜り、別当職に任ぜられる

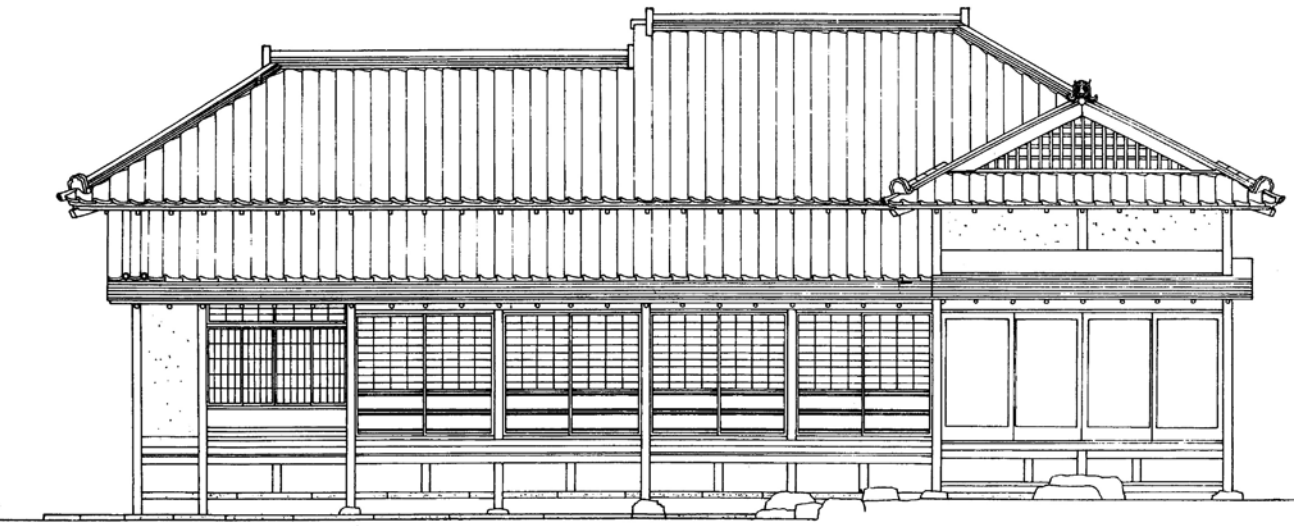
- 四天王寺建立（五九三）
- 小野妹子を隋に派遣（六〇七）
- 平城京に遷都（七一〇）
- 平安京に遷都（七九四）
- 最澄が天台宗を開く（八〇五）
- 天台宗と深い関係を築き、代々の住職は比叡山で学んだ
- 源信が『往生要集』を著す（九八五）
- 平安貴族に浄土信仰が広まる
- 藤原頼通、平等院鳳凰堂建立（一〇五二）
- 法然が浄土宗を開く（一一七五）
- 壇ノ浦の合戦、平家滅亡（一一八五）
- 天台座主慈円和尚、当寺を訪れ木津山と揮号
- 鎌倉幕府が成立（一一九二）
- 親鸞が浄土真宗を開く（一二三四）

親鸞聖人
1173−1262

1300 南北朝時代	1400 室町時代	1500 安土桃山時代	1600	1700 江戸時代	1800 明治	1900 大正 昭和	2000 平成 令和
●二十三世 浄聲 元亨三年癸亥三月晦日寂（一三二三）七十三才 ●二十四世 賢常 暦応二年己卯九月十日寂（一三三九）四十九才	●二十五世 意信 応永十九年壬辰十月十八日寂（一四一二）七十八才 ●二十六世 乗賢 応永二十九年壬寅四月十一日寂（一四二二） ●二十七世 乗教 長禄二年戊寅八月二十九日寂（一四五八） ●二十八世 宗空 文明十五年癸卯十二月二十九日寂（一四八三）	●二十九世 乗空 大永四年甲申六月十一日寂（一五二四） ●三十世 教龍 永禄十一年戊辰七月二十三日寂（一五六八）	●三十一世 定龍 寛永十七年庚辰四月十九日寂（一六四〇） 賢融 《定龍の養子》寛永二年乙丑正月九日焼死（一六二五） ●三十二世 賢龍 寛文三年癸卯九月一日寂（一六六三）	●三十三世 明龍 宝永元年甲申三月十六日寂（一七〇四） ●三十四世 観龍 寛政元年己酉十月十一日寂（一七八九）八十二才	●三十五世 時龍 寛政十二年庚申六月二十四日寂（一八〇〇） ●三十六世 降龍 安政五年戊午正月一日寂（一八五八）百才 ●三十七世 昇龍 天保六年乙未九月十五日寂（一八三五）五十三才 ●三十八世 英龍 明治十九年丙戌七月二十六日寂（一八八六）七十九才 ●三十九世 覺龍 安政四年丁巳九月十九日寂（一八五七） ●四十世 玄龍 明治十九年丙戌七月三十一日寂（一八八六）四十四才	●四十一世 經龍 昭和十八年癸未十二月五日寂（一九四三）七十三才 ●四十二世 攝龍 昭和六十一年丙寅五月二十一日寂（一九八六）八十才	●四十三世 功龍 平成二十六年八月三十日寂（二〇一四）七十八才 ●四十四世 真龍〈現住職〉 法嗣 碩龍
	浄土真宗に与し、蓮如上人より「六字名号」（宗宝）を賜る	応仁の兵火で境内焼亡 永正四年、現今の地に堂宇再建	定龍、准如上人より「願」の字を許され、寺号を願泉寺となし、旦下山願泉寺と称することとなる 伊達政宗に客殿（蔽芾堂）、茶席（泰慶堂）を贈られる 寛永の大火で堂宇焼亡	九間四方の本堂、大庫裡、再建	降龍制作の横笛、法親王より「柴舟」の銘を賜る 長州討伐（当寺より出陣）	雅亮会が結成され、經龍（樟陰）が初代会長となる 昭和二十年、大阪大空襲により客殿、茶室等焼亡 昭和二十五年、本堂再建 昭和五十一年、攝龍が大阪文化賞受賞	平成十五年、本堂大改修 平成二十六年、功龍が恩賜賞・日本藝術院賞を受賞する
室町幕府が成立（一三三八）	応仁の乱（一四六七～一四七七） 蓮如が石山本願寺を建立（一四九六）	石山法難（一五七〇～一五八一） 本能寺の変（一五八二）	関ヶ原の戦（一六〇〇） 江戸幕府が成立（一六〇三）		ペリーが浦賀に来る（一八五三） 明治維新（一八六七）	太平洋戦争（一九四一～一九四五）	
蓮如 1415–1499	顕如 1543–1592	証如 1516–1554	准如 1577–1630	寂如 1651–1725	住如 1704–1770	広如 1798–1871	法如 1707–1789
							即如 1945–
							専如（大谷光淳現門主） 1977–

〒556-0014 大阪市浪速区大国2丁目2-27

TEL&FAX 06-6641-0084

日下山 願泉寺

戦災で焼失する前の書院　— この書院内に国宝の客殿と茶室があった —